

ゼミ活動における学生指導とその成果

——フィールドワークと地域人材育成プログラム，地域総合研究所プログラムの併用

武藤 那賀子*

1. はじめに

本報告書は、フィールドワークと地域人材育成プログラム，そして地域総合研究所プロジェクトを併用したゼミ活動を元として，二人の学生に焦点化し，報告するものである。まず，報告者のゼミナールにおける2022年度の活動は以下の通りである¹。

- ①4/29-5/1 屋久島（本坊酒造見学，縄文杉トレッキング）
- ②6/10 平川動物公園フィールドワーク（菖蒲祭りと『伊勢物語』「東下り」）
- ③6/25 石蔵ミュージアム見学
- ④9/5-9/8 ゼミ合宿 in 東京（貴重古典籍閲覧，島津関連地・明治建築巡り）
- ⑤11/12 都城（市立美術館，市立図書館，島津邸，霧島酒造）
- ⑥12/3 旧島津氏玉里邸庭園

上記したもののうち，①③⑤には酒造訪問が入っている。これは，報告者が，地域総合研究所のプロジェクト「経済・文化からみた酒と鹿児島」（2022-2023年度）の所員になっていることに関係する。指導教員が酒造の研究をしている期間に，地域人材育成プログラムやフィールドワークを併用して，鹿児島県内の酒造に赴くということは，知識不足の回避につながるのみならず，訪問先を増やすことに繋がるため，相乗効果が期待できる。その最大の例は，①の屋久島でのフィールドワークである。鹿児島県民であるにもかかわらず，県内にある世界遺産を訪問したことがない学生は多い。ただし，仙巖園や旧鹿児島紡績所技師館（異人館）といった鹿児島市内にある施設は簡単に訪問できるため，訪問し辛い離島に着眼した。屋久島で世界遺産登録されている箇所は縄文杉を含めた島の西側である。だが，とくに行き辛いところという観点から，縄文杉トレッキングを行なうことにした。また，BSフジ「ウイスキーペディア」において，本坊酒造が屋久島でウイスキー造りを行なっていると紹介されていたため，焼酎酒造とウイスキー酒造の2つを見学することとした。

以上を踏まえて，次節以降で学生への指導とその成果についてみてゆく。

キーワード：学生指導，ゼミ活動，地域人材育成プログラム，フィールドワーク

* 本学国際文化学部准教授

1 なお，大学院ゼミも含めると，この他に2件のゼミ活動が加わる。ただし，本報告書は，学部生のゼミ活動に焦点化したものであるため，院ゼミは含めない。

2. ゼミ活動の行程表の作成

2022年度のゼミ活動において、行程表が必要となるものは、①屋久島、④ゼミ合宿 in 東京、⑤都城の3つであった。いずれも、1人の学部3年生が担当した。この学生は、自身のパソコンを持っておらず、演習授業の準備も大学で行なっている。しかし、演習の授業が少ないこともあり、あまりタイピングが上手ではなかった²。この学生に、報告者は行程表の作り方を教えた。使用するものはPowerPointで、そこで無料のテンプレートから行程を書くのに合うものを選択する。あとは、画像の貼り方やパソコンでのスクリーンショットの取り方等を教えた。

2-1. 屋久島

年度の最初に行なったゼミ活動である屋久島の行程表については、報告者が学生の横に座り、学生がパソコンを操作して作成した。この活動では、本坊酒造への訪問と縄文杉トレッキングがメインであった。そのため、表紙には、この2つの画像に、宿泊先とフェリーの写真を載せた（【図1-1】）。どの写真を選ぶのかということも、話し合いながら決めていった。また、この活動の主だった目的、目的地の地図、宿泊先の住所と連絡先、そして各必要経費を詳細に掲載するページも設けた（【図1-2】）。行程表を作成しておらず、詳細を把握できていない学生にとっては、必要経費の詳細が分からなければ不安／不満が出てくる可能性がある。そのため、フェリー代のみならずトレッキング道具一式、入山料等、調べていなければわからないことは全て、金額とともに掲載する必要がある。そして、詳細な行程表を掲載する（【図1-3】【図1-4】）。屋久島は、公共交通機関があまりなく、またゴールデンウィーク期間中ということもあり、混雑が予想された。そのため、乗り遅れがないように、詳細な行程表を作成しておく必要がある。また、縄文杉トレッキングに行くためのバスは非常に分かりづらいため、必要な個所の路線図も掲載した。最後に、持ち物リストとバスの時刻表を掲載した（【図1-5】）。離島であること、ゴールデンウィーク期間中であるということから、現地の店舗で調達するという選択肢がないことを事前に学生たち全員に伝え、そのうえで最低限必要な持ち物リストを作成する。都市部での活動であれば不要であるものも全てリストに入れることにした。



【図1-1】表紙・後表紙

2 最初は両手の人差し指のみでのタイピングであった。

plan

世界遺産に登録されている縄文杉を見に行く。
 (縄文杉までの交通等についても勉強の一環)
 また、屋久島にある本坊産産でワイスキー製造を見学する。
 (焼酎以外の酒類の製造工程を知る)

Member

武藤 博美子
宇 崇雄
坂口 佑彦
坂元 佑哉
徳山 博美子
福島 愛希

Map

西暦永久保
 観光船長船所屋久島船行1043-56
 TEL. 0997-49-7033

フェリー代金 (往復)	10700円
トレッキング用具レンタル	4300円
登山杖レンタル	2400円
屋久島文化村センター見学	600円
お弁当 (30日継続)	1100円
入山料	1000円
宿泊料金 (2泊)	9200円
合計	29300円

*その他バス

【図1-2】 宿泊先住所，金額等

Schedule 4/29 FRI

7:30	南郷渡渡客ターミナル 乗船
8:30	鹿野島乗船 (フェリー)
12:30	雲之峯乗船
12:40	屋久島観光センター
	道しるべ山
	登山杖レンタル
13:00	屋久島文化村センター見学
	永久保へ (タクシー) *翌日のお弁当発注
14:38	永久保へ (バス、屋久神社へ) 340円
15:00	本坊産産見学
16:05	屋久神社へ (バス、高タニカルリサーチパークへ) 450円
17:09	高タニカルリサーチパーク (夜間観望へ) 490円
18:00	夕食 (屋久島)
19:30	永久保へ (タクシー)
21:00	就寝

Schedule 4/30 SAT

3:15	起床
4:30	永久保へ (バス、屋久島自然館へ) 440円
5:00	屋久島自然館 (バス、雲川登山口へ)
5:35	朝食
6:00	入山、世界遺産縄文杉へ
17:00	雲川登山口 (バス、屋久島自然館へ)
18:08	屋久島自然館 (バス、安楽港へ)
	Aコープ安楽港で翌日の朝食購入
19:30	夕食 (定食・バスカタまりさん)
	永久保へ (タクシー)
22:00頃?	就寝

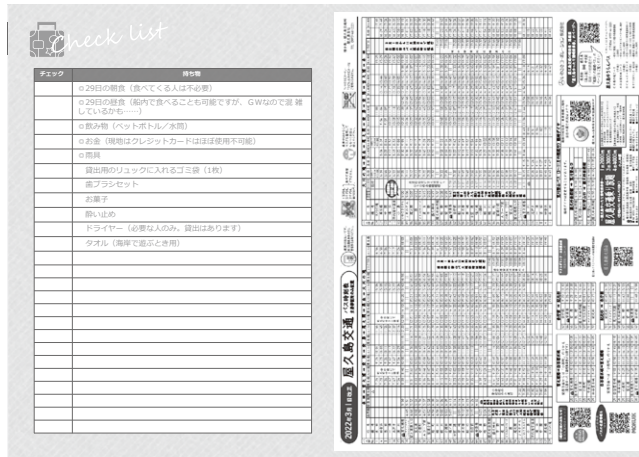
【図1-3】 行程表①

Schedule 5/1 SUN

7:30	起床
	朝食・洗濯
	チェックアウト
	田代海岸散策 (片道15分)
11:04	永久保へ (バス)
11:30	朝食
	Restaurant Cafe 屋久島
12:30	屋久島観光センターでトレッキングシューズ脱卸
13:30	雲之峯乗船 (フェリー)
17:30	鹿野島乗船

【懸念事項】
 既のような雨が落ちてきている場合、本学がプレートの落下で危険にさらされる懸念。乗客の安全を確保して乗客するため、バスが立ち回り、内部には乗客が移動できない状態。400年前の縄文杉山の登山口までで、本学がプレートで落下して危険にさらされる懸念でやめておく。

【図1-4】 行程表②，バス路線図



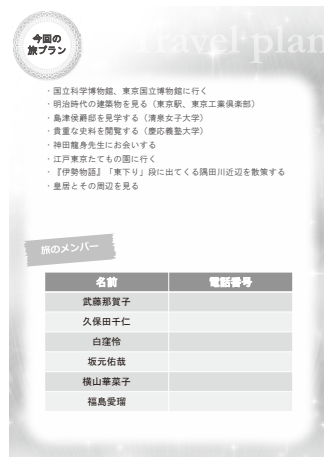
【図1-5】 持ち物リスト，バス時刻表

2-2. ゼミ合宿 in 東京

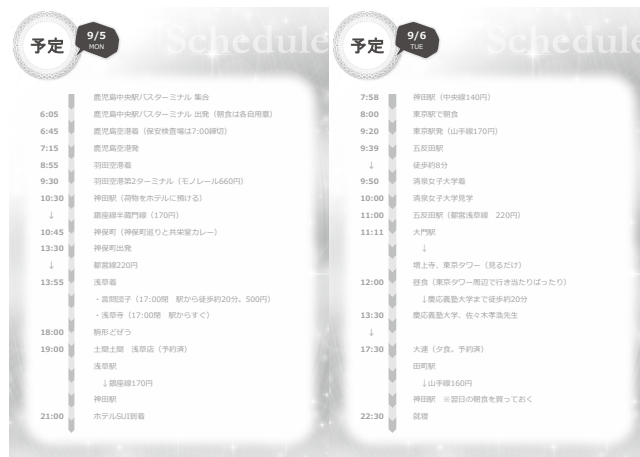
2022年度のゼミ合宿の行先は東京であった。公共交通機関の不便はないため、行程表の原案は学生が1人で作成させた。学生は、屋久島での活動の際に作成した行程表とは違うテンプレートを用いていたため、学生のオリジナリティが出ていた。とくに、表紙の画像の選択が良いと思った（【図2-1】）。ただし、活動の目的が空欄になっていたため、報告者の方で訂正を入れた（【図2-2】）。行程表については完璧にできていた（【図2-3】 【図2-4】）。持ち物リストは完璧であったが、地図は入れられなかったようである（【図2-5】）。とくに、この合宿の目的地の一つである慶應義塾大学ス道文庫では、奈良時代の古典籍や史資料を閲覧する機会があったため、閲覧に必要なものが複数あった。それらを過不足なくリストに入れられていたのは本人の管理の賜物であろう。地図は、入れ方が分からなかったのか、訪問先が多いためか不明であったため、今回は報告者が入れた（【図2-6】）。



【図2-1】 表紙，参加者一覧



【図2-2】訂正後



【図2-3】行程表①



【図2-4】行程表②

今回の旅行プラン

プラン概要

右の順番で都城市内をまわる

- ・都城市立美術館では歌川広重の特別展を観覧
- ・霧島酒造では芋焼酎の製造過程を見学する

今回の目的地

目的地

1. 都城市立美術館
2. 都城島津邸
3. 都城市立図書館
4. 霧島酒造

都城市マップ

①：都城市立美術館

②：都城島津邸

③：都城市立図書館

④：霧島酒造

スケジュール

7:30	鹿児島中央駅集合
7:40	鹿児島中央駅発 きりしま4号乗車
9:06	都城駅到着
9:30	タクシー乗車
9:40	都城市立美術館到着・観覧
11:30	昼食(場所未定)
12:45	出発(徒歩約10分)
13:00	都城島津邸 見学
14:00	都城島津邸出発(徒歩約20分)
14:30	都城市立図書館 見学
15:00	都城市立図書館前でタクシー乗車
15:15	霧島酒造到着・見学(15:30~16:30 見学)
	工場見学後、ファクトリーガーデン内を見学
17:30	タクシー乗車
17:45	都城駅到着
18:27	都城駅発 きりしま15号
19:44	鹿児島中央駅到着

【図3】都城フィールドワークのしおり

今回は、地図の挿入等も全て最初からできており、報告者の方で訂正する点はなかった。4月、9月、11月と、一人の学部生が行程表を作成してきた過程を示してきたが、徐々に行程表の作成に慣れていっていきることがわかる。さらに、この学部生は、4月の段階に比べ、タイピングも上手になっていた。

この学部生の指導を通して得られた成果は次の4点である。

- A. 行程表を作成することにより、食事の予約や公共交通の時刻の確認の必要がある箇所が抜けていることに学生自身が気付ける。
- B. 金銭面（宿泊費、交通費、その他）の整理を自身で行ってから教員に相談してくるため相談回数

が減り、本人の負担も減った。

C. 行程表の作成を重ねていくなかで学生自身のミスが減り、それが結果として学生自身の自信に繋がったようであった。

D. 行程表の作成をする中で、パソコンの扱い（タイピングだけではない）が格段に上がった。

3. 地域人材育成プログラム

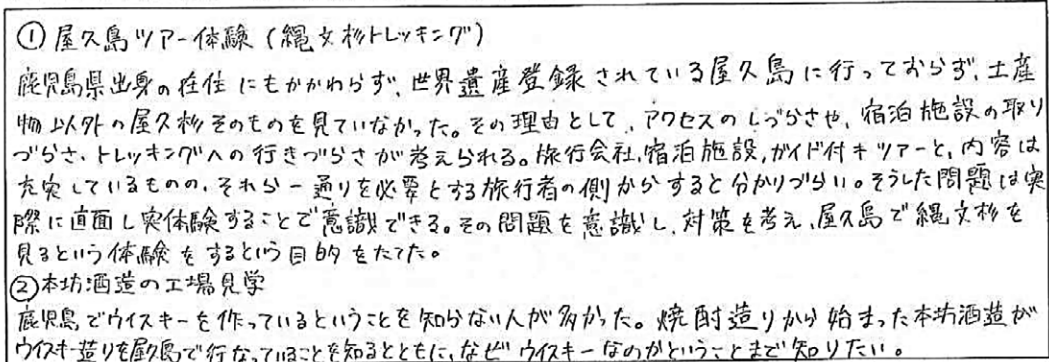
報告者のゼミナールでは、2022年度から地域人材育成プログラムに参入した。このため、この年度に2年生であった学年が該当学年となる。地域人材育成プログラムの予算で訪問したのは、最初に掲げた①の屋久島と⑤の都城である。

3-1. 屋久島

既述したように、屋久島では、縄文杉トレッキングと焼酎酒造およびウイスキー酒造の見学を目的とした。

該当学生が提出した「フィールドワーク活動記録」を見てみると、3「活動計画」は、報告者が手渡していた「地域フィールド演習 実施計画書」の文言をほぼそのまま使用していた（【図4-1】）。

3. 活動計画（研修や講座の趣旨等に基づき、各自計画を立ててください）



【図4-1】「フィールドワーク活動記録」の「活動計画」

一方、4「活動報告」は、フィールドワーク中に該当学生が取っていたメモを基に作成されていた（【図4-2】）。

4. 活動報告（計画に対しての振り返りと感想・学び・気づき・反省点など）

年度末に自己成長を記録する「到達確認」(21p)を行います。振り返りには、①考え抜く力（計画の立案と実践）、②人と良い関係を作る力（コミュニケーション力と協調性）、③自分自身を伸ばす力（感情のコントロールと自主性・積極性）、④地域への関心・理解・志向力（地域理解・地域志向）の観点をもとに記入してください。

世界遺産である総文杉へ登った。登山途中、小杉谷小・中学校の跡地がある。そこから約2.5km登る。登る途中にはウルソノ株と大玉杉があり、そこから1時間ほど登ると夫婦杉がある。2つの杉が真ん中でつながらず、その様子が夫婦杉だといわれ、夫婦杉と呼ばれている。さらに登るとようやく総文杉へたどり着く。行きは登るだけなので行きやすいが、下りは危険だということを知った。ウルソノ株の中に祠があり、屋久島の人々の畏敬の念が感じられ観光客が訪れることで単純な山岳信仰ではなく、人々の生活を支えている基礎となっていることが分かった。留学生と一緒にトレッキングすること、道を譲る際によく「ありがとうございます。」と言うという文化の違いを知ることができた。登山途中に、トロッコで渡るための橋があり、怖くて最初は一人で渡ることはできなかった。しかし、下山の時には少し渡れるようになったのでとても嬉しかった。

焼酎の製造工程の見学では、芋をつぶす機械や、発酵の工程を知ることができた。ウイスキー（アズキ）の蔵を特別に見学させてもらった。沢山の樽が並べられており、とても臭い匂いだった。トロッコの道という、海に直接流れこみ、国内に2ヶ所しかない港をわたるルートだった。とても新感覚ではなかった。

【図4-2】「フィールドワーク活動記録」の「活動報告」

ウルソノ株にある祠に対して、「屋久島の人々の畏敬の念が感じられ」という点等を見ると、報告者が予想していた以上に見聞を広めていたことがわかる。

3-2. 都城

報告者のゼミナールでは、玉里島津家の文庫を扱っている。その関係で、島津家についての見聞も広めることを目的としており、仙巖園や旧鹿児島紡績所技師館（異人館）関吉の疎水溝のみならず、旧島津氏玉里亭庭園にも何度も訪れている。都城は、宮崎県ではあるものの、旧薩摩藩である。また、都城島津家は、島津家の祖という位置付けであり、邸宅も残っている。

また、都城には「霧島酒造」がある。鹿児島県内の焼酎の酒造は中小規模が多いが、霧島酒造のそれは大きい。この規模の違いを実感することは地域の学びに繋がる。さらに、フィールドワークを企画した時期に、ちょうど、都城市立美術館で「東海道五十三次」の全版画を保永堂版と丸清版の2種類ずつ展示するというイベントが行われていた。報告者のゼミでは、最初に掲げた②の平川動物公園へのフィールドワーク時に『伊勢物語』『東下り』段を扱うが、これがまさに東海道の話である。加えて、④のゼミ合宿in東京では、東海道の端である武蔵国の何地点かも訪れている。古文で学んだ地点と、実際に訪れたことのある地点が江戸時代の版画でどのように示されていたのかが分かるのみならず、全ての地点において、保永堂版と丸清版の二つの版画が展示されることで、別の視点からの景色として見ることも可能となる。さらに、報告者のゼミナールに所属している学生の中には、司書の資格を取得予定の学生がいるため、市立図書館としてはかなり革新的な都城市立図書館も訪問することにした。

かくして都城島津邸、都城市立美術館、都城市立図書館、霧島酒造の四か所を巡ることになったのだが、どの順番で回るべきなのかという問題が発生する。これに関しては、都城市出身の大学院生の助力を得て、既述した学部3年生が行程表を作成してくれた。その行程表を見て、地域人材育成プログラムの該当学生は、何を学びに行くのかを確認し、フィールドワーク終了後に「フィールドワーク活動記録」を提出した（【図5】）。

4. 活動報告(計画に対しての振り返りと感想・学び・気づき・反省点など)

年度末に自己成長を記録する「到達確認」(21p)を行います。振り返りには、①考え抜く力(計画の立案と実践)、②人と良い関係を作る力(コミュニケーション力と協調性)、③自分自身を伸ばす力(感情のコントロールと自主性・積極性)、④地域への関心・理解・志向力(地域理解・地域志向)の観点をもとに記入してください。

都城市立美術館で、東洋画五十三次を見た。細かい髪の毛の玉のような細かい線があり、当時の版画の技術と色づかいの素晴らしさに感動した。また、版画の作られる工程が分かりやすく展示されていた。島津邸では、昭和天皇皇后陛下が使用された浴室や、寝室などが公開されていた。控室として利用されていた和室では、都城市の歴史がわかるDVDがあった。また、食堂では食事のレプリカや調度品が展示されており、当時の雰囲気も再現されていた。本館の中には、沢山の資料が保管されていたと見られる目録が記されていた。都城市立図書館は、オハラホールのように見えて、天井の高い館内で1階ではカフェがあった。また、大きなスクリーンや様々な企画が開かれている部屋があった。2階の本棚には昔から現代までの本が年代順に並べられており、沢山の雑誌が棚に並ぶように並べられており、棚の作りが面白かった。館内各場所に四角い棚が置いてあり、それが改造できるように工夫されていた。椅子の数は、他の図書館に比べてとても多いように感じた。一つの部屋に個性のある名前がつけられており、不思議な気持ちになった。霧島酒造では、焼酎作りの工程を映像や大きな窓から見ることができた。アート作品やアークもあり、焼酎の香りも体感したり、さつまももを食したりなど、五感を使って霧島酒造の焼酎作りを学んだ。

【図5】「フィールドワーク活動記録」の「活動報告」

巡った箇所が多かったこと、それぞれの地点で学んだことが多かったこと、また、記述量とその内容から、書ききれなかったことが推察される。このフィールドワークに関する活動記録に関しては、報告者は、Wordでの書き込みにすれば、もっと学生自身の学びに繋がるのではないかと思う。

4. おわりに

2022年度は、報告者は、フィールドワークと地域人材育成プログラム、そして地域総合研究所プロジェクトを併用したゼミ活動を行なうことができた。これは、本学が地域に関する学びや研究に提供してくれる予算が潤沢であることを示す。ただし、予算が潤沢であるということは、それを受け取る側にも義務が発生する。その義務は、学生側にも「フィールドワーク活動記録」を書いて提出するというものだ。義務は義務として必要だが、それが学生自身のより深い学びに繋がらなければ意味がない。

今の学生は、基本的にスマートフォン等の機器類を持っている。「ミレニウム世代」に比べ、「デジタルネイティブ」や「Z世代」は、スマートフォンの扱いには慣れているが、パソコンの扱いには慣れていない。加えて、レポートもスマートフォンで書いて提出する学生は少なくなく、結果として非常に短いレポートが提出されることがある。短いレポートしか書けないということは、言い換えれば深く思考することができないということである。

スマートフォンの扱いに慣れているという点、およびパソコンの扱いにあまり慣れていない学生が多いという点、そしてきちんと思考されたアウトプットを苦手とする学生が多いという点を考慮するならば、「フィールドワーク活動記録」はWordで作成し、出力ないしPDF化して提出するという方法に統一した方が良いのではないだろうか。ただし、現代は手書きをする機会が少ないことを考えると、手書きの文章を提出させるというのも教育上必要であろう。だが、「思考すること」に重点を置くのであれば³⁾、Word等で長い文章を提出させるという方法を選択した方が良いのではないだろうか。以上を、2022年度のフィールドワークの報告とする。

3) ただし、「手の開放」と「脳の開放」を考えると、手書きすることは重要である。なお、「手の開放」と「脳の開放」については、石田英敬・東浩紀『新記号論 脳とメディアが出会うとき』(株式会社ゲンロン、2019年)の解説が面白い。